

上条 報告

第26号
平成23年7月

甲州市教育委員会
☎32-5097

甘草屋敷とも縁のある 奈良・吉野地域の伝建地区

奈良県には、茅葺切妻造民家が広く分布しています。「報告 第三号」で一度触れましたが、茅葺切妻造民家の分布は非常に限られており、全国に三ヶ所しかないといわれています。① 峡東を中心とした地域（突き上げ屋根）、② 岐阜県北部から富山県南部にかけての地域（合掌造）、③ 奈良県中・南部の地域（大和棟・高塀造）、です。

合掌造と高塀造は屋根の勾配が急で、これは屋根を支える叉首（さす）の構造上のものと考えられ、棟持柱をもつ甲州民家とは異なります。また、高塀造は中央部分を茅で葺き、左右の下屋は勾配の緩い瓦葺というが多く、屋根材を茅だけに依存しているわけではありません。そのため、私たちが考える茅葺とはちょっと違って見えるかもしれません。

今号で紹介するのは、奈良・吉野地域に近い宇陀市松山の伝建地区です。この地区内には高塀造の民家はほとんどみられません。甘草屋敷と縁がある史跡が保存されています。



高塀造（大和棟）の民家

宇陀市松山（商町屋）

所在地

奈良県宇陀市大宇陀区、万六、出新、上新、中新、上、上中、上本、上茶、下本、下中、下出口、小出口の全地域及び下茶、春日、拾生の各一部

種別

商町屋

条例制定年月日

平成一六年一月一七日

選定年月日

平成一八年七月五日

地区面積

約一七・〇ヘクタール

保存物件数

建築物 一二八件
工作物 八八件
環境物件 二八件

宇陀市松山地区は、かつては大宇陀町といい、長い歴史をもった町です。周囲を吉野山地、竜門山地、大和高原などの山々に囲まれた辺境の地ではありませんが、京都や奈良と伊勢をつなぐ交通の要衝だったことから、古くから中央の影響を受けながら発達してきました。

日本の歴史に宇陀が登場するのはかなり早く、飛鳥時代までさかのぼります。宇陀地域の山々は鳥獣が豊富だったために絶好の狩猟場として見出され、「阿騎野」という呼び名で日本書紀に登場しています。また、柿本人麻呂が軽皇子（文武天皇）の狩猟の情景を詠んだ歌も、阿騎野でのことと知られています。

東（ひむがし）の野に炎（かぎろひ）の

立つ見えて

かえり見すれば 月傾きぬ

交通の要衝だった宇陀地域が、町戸して形づくられ始めたのは戦国時代、秋山庄の荘官から国人領主に成長した秋山氏が城を築き、その城下町として山腹に築いたのが現在の松山の起源であるといわれています。その後秋山氏は豊臣氏に追放され、秋山城には秀吉の弟・秀長の家臣が入り、この頃に城の大規模改修と城下町の拡大整備が行われ、現在の町並みの骨格が整えられました。

元和元年（一六一五）に城は壊されましたが、宇陀松山藩となつてからは織田信長の次男信雄（のぶかつ）が初代藩主となり、四代にわたって松山藩を治めました。



宇陀市松山の町並み

やがて近代に入ると郡役所や裁判所ができ、政治の中心地として栄えたほか、県内初の乗り合いバスが走り、数十件の料理旅館がひしめいた時期があり、昭和の半ばまでその賑わいは続きました。

一時期に一気に繁栄したわけではなく、各時代の影響を受けながら、家ごとに異なる時代の特徴をもっている町並みです。

甘草屋敷

との関係

伝建地区の中ほどや南側に、森野吉野葛本舗という吉野葛の製造販売をしている店があります。創業四百年といわれて、天皇御即位式には森野吉野葛をお供えする慣わしが今も残っているとのこと。



森野吉野葛本舗。背後の山に薬園がある

吉野葛を作り始めて十代目・森野藤助が、享保十四年（一七二九）に自宅裏山に開いた個人の薬園が「森野旧薬園」です。小石川薬園と並ぶ日本最古の薬園で、幕府直営ではなく民間薬園であるということが評価され、大正十五年二月に国の史跡に指定されました。

森野藤助が薬園を開設するにあたり、そのきっかけを作った人物は植村左平次政勝という幕府採薬使です。左平次は享保十四年に一五〇日にも及ぶ現地調査「伊賀伊勢紀伊大和山城河内六カ国御用」を実施し、藤助はその調査に随行、その



薬園から見下ろす松山地区の町並み。



園内に咲くツワブキ。約 250 種の薬草木が植えられている。葛も「葛根湯」に使われる薬草のひとつ。



薬の館・細川家住宅。



薬の館の内部。短冊状の細長い建物の中ほどにある土間に据えられたカマド。瓦を使っている。

ときの報奨として幕府から薬草を拝領して、自ら採取した薬草とともに裏山へ植えて栽培を始めたのが始まりです。

植村左平次は、「六カ国御用」の六年前、享保八年に甘草屋敷を訪れており、甘草を掘り抜いていったと「甘草文書」に記されています。幕府が藤助に与えた薬草の中に甘草が含まれており、この甘草はもと甲州産のものといわれています。

現在、森野旧薬園に甘草はみられません。遠い吉野の地まで甲州甘草が運ばれていたということからは、感慨深いものがあります。

薬のまち・大宇陀

吉野葛を含めて、この周辺に薬草が自生していることは古くから知られており、採薬の場として利用されてきました。そのため、町並みの中で「薬」の看板をかかっている家が散見されます。

そのうちの軒、細川家住宅はもと薬問屋で、江

戸時代に隆盛をきわめ、天保七年（一八三五）に「人参五臓圓」や「天寿丸」という腹薬を売り出し、人気を集めました。藤沢薬品工業（現アステラス製薬）の創設者の母の生家でもあります。細川家住宅は、現在「薬の館」として宇陀市が維持管理しており、調剤・製剤の用具や薬の看板類、藤沢薬品の資料等を展示しています。

このほかにも、地区内で営業している旅館では薬膳料理を提供しているところもあり、古くから薬と深く関わっていた土地柄であることがわかります。

家は、西日本でよくみられる格子、虫籠窓（むしこまど・道路側に空けた、二階の格子つき窓）、卯建（うだつ・妻壁を屋根より高くし、小屋根をつけたもの）のある風景で、ほかの伝建地区よりも広くゆったりとした通りの両側には水路が設けられ、洗練された雰囲気があります。

こんな「古都・奈良」もありますので、機会があれば訪ねてみてください。